

『日本書紀に於ける

「也」字の一考察

北 島 伊 都 子

福田良輔先生の「書紀に見えてゐる『之』字について」
（臺北帝國大学文学科研究年報・才一輯）の中で述べてお
られる、

一、漢文的用字例をみていくことによつて、古事記と日
本書紀との記載法の相違点や類似点を考察する。

一、それによつて古事記の記録者と書紀の編纂者達との
言語意識や用字意識の相違を知る。

一、他の奈良朝時代の文献との関係をみて、そこから何
か体系的な統一あるものを見出すこと、その場合例外が生
じれば、それは如何なる場合に生じ、如何なる理由による
ものであるか等を考察する。

一、誤字、誤写の問題、それに伴う古写本の系統、各古
写本の価値を推察できる。

一、編纂の態度や成立について考察し、そこに上代人の
思想やその変化の現われを見出す。

などの問題を頭において、「也」字をとりあげ同じような
考察を試みた。そして「之」字の場合と同じように、「也」
字の場合でも字音仮名「也⁺」としての用法はとり扱わない

ことにして、漢文的用字例ともいうべき表意的用字例につ
いてのみ述べることにした。しかし書紀に於いては字音仮
名「也⁺」としての用法が全然見えないというのは、一つの
特色である。

先ず(一)では、名詞に接続した場合の「也」字の用法につ
いて述べた。そして更にそれを、

A、断定、強調、感動などを表わした文に「也」字が用
いられた場合。

B、疑問文に用いられた場合。

C、推量を表わした場合。

D、主部或は主語となるべき語の下に添えて用いられた
場合。

E、文中に「也」字があつて目的を表わす語に添えられ
た場合。

などに小分し、卷々の特徴や、上代人の用字意識をより
くわしく知ろうとつとめた。それぞれの用例を次に示して
みる。

A、此童女是吾兒也。（卷一・四〇）

籥。小竹也。（卷一・四二）

天下太平也。（卷六・一八四）

B、天皇問曰。教^ニ如此者誰神也。

（卷五・一六〇）

因問曰。汝何國人也。（卷六・一九二）

C、大雨從ニ狹穗ニ發而來之濡ニ面。是何祥也。

(卷六・一七九)

子皇子豈違ニ帝勅ニ安改而令。必是虛也。

(卷一七・一八)

D、答曰。族也勿ニ看吾ニ矣。(卷一・二二)

是慕者曰也人作。夜也神作。

(卷五・一六六)

E、先擊ニ八十梟帥於国見丘ニ破斬之。是役也。天皇志存ニ必克。

(卷三・一二二)

Aは「也」字の用例中もつとも多く見え、その当時の一般的な用法であつたと思われるが、書紀中には僅かながら、省略された形も見える。たゞ「天下太平也」の用例は他の例とは少し異なるようである。これはもとく中国に於いては「天下太平」で「天下太平なり」の意を表わすものであるのが、我国に移された場合、或る者は「也」字を添え、或る者は、そのまま持つてきたものと思われる。卷六に於いては、二例とも「天下太平也」と「也」字が添えられているが、卷十一・十二では「天下太平」である。いづれでも意味は勿論同じであり、訓みも「天下タヒラカナリ(ゾ)」などと訓まれるのであろう。

Bは編纂者の用字意識の相違によつて、或は「耶」「歟」「乎」等の文字を用いたのか、文の内容的なことの相違によるのか、今一度考察を要するところである。

Dは「也」字が「者」字と通用されていて、漢文の助字として用いられたもので「也」字は訓むべきものではない。

Eは書紀中たゞ一例のみの用法である。

次に名詞に接続した場合の誤字、脱字などについて巻次を追つて検討してみたいと思う。

① 是即畝丘樹下所居之神。

② 即此経津主神之祖・矣。

③ 此則筑紫胸肩君等所祭神是也。

④ 此太古之遺法也。

⑤ 初大己貴神之平国也。

⑥は神の下に、北本、丹本には「也」字があるといふのである。これは「コノモトニマスカミナリ(ゾ)」など、訓まれるものであつて、説明の文であるから「也」字があつて不思議ではないし、むしろこういう説明の文にはあつて然るべきだと思ふ。勿論省略された場合もあるにはあるが、それはほんの僅かであるし卷一に於いては見られない。

⑥に於いては、丹本に「之祖也矣」と作られているといふのである。卷一には「之也」「者也」の他に「之焉」「者矣」などの用例も見えるし、かなり「也」「矣」が複雑に使用されているから「也矣」など、語末に助字を重ねて用いたとしてもおかしくない。しかし他に「也矣」を用

いた例はなく同じような用例をみるとみな「之祖也」「遠祖也」「祖也」などゝ見えるところから、こゝも「之祖也」か「之祖矣」かのいずれかであろうと思う。「也」と「矣」が通用されていたことは経伝釈詞にも「也猶矣也」として見えるところである。

㊦は島本にないのであるが「……命是也」「……神是也」などゝ同じような記載が卷一に於いてだけでも五例見え(他の卷にも見える)みな「也」字は記載されているし、文としてもあつて然るべきところであると思うので、ある方に従いたいと思う。

㊧も文としては「也」字があつてもいゝところである。

卷二に於いては

① 此其縁也。是後……

② 是吾兒可。王之地也。

③ 此昔我賜天稚彦之矢也。

④ 吾是天神之子。

⑤ 次彦火出見尊。

⑥ 対曰。天照大神之子所幸道路。有如此居之者誰也。

⑦は丹本に「……是也」とあるというのだが書紀に於いて「此其縁也」「是其縁也」「其是之縁也」「其此之縁也」と多少文字の違いはあるが意味としては同じものである。

つて、慣用句的に使用されていたものと思われるのである。

㊨㊩は説明文であつて「也」字の有無を一概には決し難いのであるが、あつてもさしつかえはないところである。

㊪も丹本のいうように「之也」があつてもおかしいところではないが、「……為妃而生兒、号火酢芹命、次彦火出見尊」などというような場合の文には、「也」や「之也」などは、普通用いられていず、「次……、次……」と神の名を列記してあるようである。

㊫は疑問文であるが、「也」字が疑問を表わすことは用例にも見えた。しかし「耶」「乎」「歟」などの文字も多く用いられているし、むしろその方が用いられていることが多いので、玉本が「耶」と作つているとしてもどちらとも決し難い。

卷三、四、五に見える「也」字の異同はいずれも説明文の場合であるのでその有無は決し難い。

卷七、九に見える「之始祖也」「之祖也」の「也」字は当然あるべきだと思う。というのは書紀に於いては、いくつか慣用句とも見られる用い方がなされているのであるが「(之)縁也」と同じく「祖也」「先也」というのもその一つである。この他「是年(歳)也……」という記載法がある。特に「是歳(年)也太歳戊申」等という記載法は、

簡潔で理解しやすいところから、編纂者の相違にかゝらず、一種の慣用として書紀に於いては用いられたものではないかと思われる。卷二四、二五、二六などに見える「之兆也」という表記も一種の慣用と思われる。その他諸本によつて「也」字の有無の異同があるが、説明の文、断定、強調、疑問などを表わす文の場合、早急に決し難いものが多い。しかし説明や強調の文では「也」字が表記されてい
ない方の場合は稀であるので「也」字のある方に従つてもよいと思うが、「也」字が「矣」「者」「焉」「之」などと通用されていたことを考えあわせると一概に決定してしまふのは危険である。

(二)に於いては、動詞に「也」字が接続した場合の用例を示し、名詞に接続した場合と同じように、

A、説明文、断定、強調、感動などを表わした文に「也」字が接続した場合。

B、(a)疑問を表わす場合。

(b)反語を表わす文に用いられた場合。

C、次の文へ続けて訓んだ方が自然であるような場合に「也」字が用いられている場合。

D、(a)意志を表わす場合。

(b)推量を表わす場合。

E、(a)命令の文に用いられた場合。

(b)禁止を表わす文に用いられた場合。

に小分してみた。以下才三、才四の場合も同じような要領で小分している。動詞に接続した場合の用例を示してみる。

A、即投_二其杖_一。是謂_二岐神_一也。

(卷一・一六)

今謂_二泉河_一訛也。

(卷五・一六五)

因為_二宮号_一也。

(卷一八・四四)

B、(a)……何言_二速狹騰_一也。(卷九・二四九)

問曰。小兒等言。於_二吾野中_一客人有_レ在何得_レ不_二

迎礼_一也。(卷一九・八一)

(b)自_レ今以後。豈背_二天朝_一也。

(卷一四・三七四)

孰_二与全_レ身免_レ危也歟。

(卷一五・四〇一)

C、及_二皇軍之得_二鷄瑞_一也。時人仍号_二鷄邑_一。

(卷三・二二六)

至_二此役_一也。意欲_二窮誅_一。

(卷三・二二七)

D、(a)則自对_二座長_一曰。奉_二娘子_一也。

(卷一三・三四二)

(b)若有_レ成_レ事。必獲_二良獸_一也。

(卷九・二五〇)

E、(a)汝等各言_二情願之物_一也。

(卷六・一八七)

(b) 慎之莫_レ怠也。 (卷七・二二五)

神戒_二天皇_一曰。無_レ往也。

(卷一四・三七五)

次に動詞に接続する場合の「也」字の用法中問題になると思われるものについて述べてみる。

先ず卷一の中で註に「下皆倣_レ此_一」というのがあるが、「此」の下に丹本、阪本には「也」字がある。卷十七の例は、前本に「也」字があり、卷十九では、「也」字のないのが北本となつている。命令の文に「也」字が用いられたのは僅かではあるが用例が見えるので、「也」字をなすものとして片づけてしまふわけにもいかないと思う。いづれとも決し難い。

次に

是謂_二岐神_一也。 (卷一・一六)

故号_二其処_一曰_二角鹿_一也。 (卷六・一七六)

のような型の記載の場合「也」字が用いられているか、いないかは卷々によつて異なつてゐる。この「謂」「曰」の字のかわりに同じような型の文に「名」「云」「号」「訓」などが用いられている。これらの文字に対して文末に「也」字が明記されているのは卷十四の「更名_二長田大娘皇女_一也。」(三五七)。卷二十の「故云_二爾也_一。」(一一一)の二例だけである。卷一では「謂_二(云、曰、号、訓)〇〇一

也」という型の文で「也」字が明記されているのは、たゞ二例だけである。しかも「謂」の字に呼応している。「也」字のかわりに「矣」「者矣」「焉」が用いられているのがほんの僅か一、二例ずつ見えるにすぎない。「也」字が比較的多く用いられているのは卷九、十一、十三である。これらの卷はこういう型の文の用例が他の卷に比べて少ないのであるが、その全用例中半分と迄はいかないまでも「也」字が用いられているのである。こういう型の文例があつても、「也」字が全然用いられていないのが卷十二、十七、十八、二三、二六、二七などである。卷二九もたゞ一例諸本によつて「也」字があるものとなしものに分れている他、全部「也」字は用いられていない。卷二八も用例は少いが用いられていない。こう見てくると勿論さういふ型の文末に「也」字を用いても用いなくても説明文であるから意味の上からは、かわりはないのであるが卷によつて「也」字が全然用いられていなかつたり、多く用いられたりしていることは編纂者の用字意識の相違といふものにその原因が求められると思う。又この他に「為_二〇〇_一也」「有_二〇〇_一也」等の型の文があるが、それについても同じようなことがいえる。そしてこの型の文では前の場合とは逆に卷九、十三などには全然「也」字が用いられていないというのも面白い事実である。

(三)に於いては、助動詞に「也」字が接続した場合について述べた。

A、譬猶_三游魚之浮_二水上_一也。(卷一・一)

未_レ有_三若此言之麗美_二者也。(卷一・三七)

B、謂_二官軍_一曰。朝日郎手誰人可_レ中也。

(卷一四・三八六)

C、(a)如生_レ男者。予以為_レ子而令_レ治_二天原_一也。

(卷一・三〇)

(b)億計恐其不_レ可_二以莅_レ国子_レ民也。

(卷一五・四一〇)

D、天照大神者可_三以治_二高天原_一也。

(卷一・一七)

我荒魂令_レ祭_二於穴門山田邑_一也。

(卷九・二四九)

右の用例は、Aは説明、或は断定、強調などを表わす文に「也」字が用いられたもの。

Rは助動詞に接続して疑問を表わしているもの。これはたゞ一例であるが、文例が少いこと、他の疑問の助字「乎」「耶」「歟」等を用いたことが原因しているのであろう。

C(a)は意志を表わし、(b)は推量を表わすと思われるものゝ例である。

Dは命令を表わす文に接続した場合の例。

次にこの用法中の「也」字の有無の問題を少し述べてみる。

(a)天照大神者可_三以治_二高天原_一也。

月読尊者可_三以治_二滄海原潮之八百重_一也。

素戔嗚尊者可_三以治_二天下_一也。

(b)①天照大神者可_三以御_二高天之原_一也。

②月夜見尊者可_三以配_レ日而知_二天事_一也。

③素戔嗚尊者可_三以御_二滄海之原_一也。

右の例は同じ内容のもので一書曰の二つの部分である。

(b)は③だけに「也」字が明記されていて①②は丹本に欠けているからという理由だけで、(b)の①②も「也」字の記載を認めるといふことは、いゝ難いのであるが、こゝでは(b)の場合も③では表記されているし欠けているのが丹本だけであるから「也」字のある方に従つてもいゝと思ふ。

④では形容詞に「也」字が接続した場合について述べてみた。この用法の例は(一)(二)の場合に比べて非常に少くなつてゐる。断定や強調、感動を表わした場合に「也」字が用いられた場合の例が最も多く、他に疑問、推量を表わしたと思われるもの、それと卷一にだけ見える用法で「愛也吾夫君」「愛也吾妹」の如く、不読の文字で特別の意味はなく「吾夫君」「吾妹」を形容する「愛」を強調し感動を表わす為めに、副詞に添えられる場合の「也」字と同じよ

第 一 表

卷数	用 例 法	第 一					第 二					第 三				第 四				第 五	第			
		A	B	C	D	E	A	B	C	D	E	A	B	C	D	A	B	C	D					
							Ⓐ	Ⓑ		Ⓐ	Ⓑ	Ⓐ	Ⓑ	Ⓐ	Ⓑ									
1	35	1		2		27	1		2	1		1		9		1	6	2	1	1	2	1		
2	40	1		3		15			3		1	1	1	3					1	1				
3	20	1		1	1	14			4					3				1					1	1
4	30					1																		
5	12	1	1	2		9		1						1					1					1
6	36	4	1	4		21			1			1		3				2						
7	33	5	2	4		25			1				1	5										1
8	7	1				2							1	1										
9	16	3	1	2		21	1		1		1			5			1							1
10	26	2				9								2					3					
11	22	3		1		21								7				2	1					
12	12	4		1		4													1					
13	21	1		1		10		1		1		1							3					
14	29	1				15	1	1					1	5	1				2					
15	29			1		10		2						4		1			4					
16	4					2								3										
17	14		1	1		8						1		2										1
18	10					2								1					1					
19	45	2		1		24	3	4		1		2	1	10				3	1					1
20	11					8								3										
21	17					4	1							1										
22	20			1		7	1					1	1	4										
23	7	1		3		1	3	1						1					2					
24	15	2				7																		
25	26					17								5					3					
26	8					1								2										
27	7					2								4										
28	13					7							1	4										
29	8					11							1	3					2					
30	9					9								1					1					
	582	33	6	23	1	314	11	10	12	3	4	10	4	92	1	1	1	7	32	5	2	2	5	3

第 一 表

第 一					第 二					第 三				第 四				第 五			第 六			第 七	計	頁數	比 率	
A	B	C	D	E	A	B	C	D	E	A	B	C	D	A	B	C	D	A	B	C	A	B	C	計				
					(A)	(B)	(A)	(B)	(A)	(B)	(A)	(B)																
35	1		2		27	1	2	1	1	9	1	6	2	1	1	2	1	3				96	49	1.98				
40	1	3			15		3		1	3				1	1			2				72	43	1.67				
20	1	1	1		14		4			3			1				1	1	1	1		49	23	2.23				
30					1																	7	38	15	2.60			
12	1	1	2		9		1			1				1								1	30	14	2.14			
36	4	1	4		21		1		1	3			2									2	75	18	4.17			
33	5	2	4		25		1			5							1					4	81	29	2.79			
7	1				2				1	1												1	13	6	2.17			
16	3	1	2		21	1	1	1		5		1					1					3	56	23	2.48			
26	2				9					2			3									1	43	15	2.87			
22	3	1			21					7			2	1								1	58	27	2.15			
12	4	1			4					1			1									2	24	10	2.40			
21	1	1			10		1	1	1				3									2	41	19	2.16			
29	1				15	1	1			5	1		2					1				1	58	34	1.71			
29		1			10		2			4		1	4									3	54	21	2.57			
4					2					3												1	10	7	1.43			
14		1	1		8			1		2								1				1	29	22	1.32			
10					2					1			1									2	16	9	1.78			
45	2	1			24	3	4	1	2	10			3	1			1	1				1	100	49	2.04			
11					8					3												1	23	15	1.53			
17					4	1				1												2	25	13	1.92			
20		1			7	1		1	1	4												1	36	33	1.09			
7	1	3			1	3	1			1			2									1	20	14	1.43			
15	2				7													2				1	27	22	1.23			
26					17					5			3									1	52	41	1.29			
8					1					2												1	12	17	0.71			
7					2					4												1	14	22	0.64			
13					7				1	4													25	19	1.32			
8					11				1	3			2									1	26	56	0.49			
9					9					1			1									1	21	37	0.57			
582	33	6	23	1	314	11	10	12	3	4	10	4	92	1	1	1	7	32	5	2	5	3	8	2	45	1224	721	1.69

第 二 表

卷	之			也			矣			焉		
1	10	336	7.35	14	96	1.98	1	67	1.37	10	31	0.63
2	4	353	8.58	18	72	1.67	3	32	0.74	13	25	0.58
3	5	175	8.33	8	49	2.23	16	9	0.41	15	12	0.55
4	29	28	2.55	4	38	2.60	30	0	0	30	1	0.07
5	15	90	6.43	13	30	2.00	4	10	0.71	9	9	0.64
6	6	149	8.27	1	75	4.00	5	12	0.67	1	18	1.00
7	17	234	4.96	3	81	2.79	21	8	0.28	8	19	0.66
8	7	58	8.00	9	13	2.17	10	3	0.50	6	4	0.67
9	9	167	7.59	6	56	2.48	24	5	0.22	4	18	0.78
10	1	135	9.64	2	43	2.87	19	5	0.33	2	13	0.87
11	2	226	9.41	11	58	2.15	12	13	0.48	6	18	0.67
12	8	79	7.90	7	24	2.40	2	8	0.80	12	6	0.60
13	3	140	8.75	10	41	2.16	13	9	0.47	20	8	0.42
14	22	109	3.50	17	58	1.71	8	18	0.53	23	11	0.32
15	21	84	4.20	5	54	2.57	14	9	0.43	17	10	0.48
16	11	44	7.33	20	10	1.43	28	1	0.14	26	2	0.29
17	27	58	2.90	24	29	1.32	20	7	0.32	27	6	0.27
18	28	25	2.78	16	16	1.78	15	3	0.42	18	4	0.44
19	18	207	4.60	12	100	2.04	23	13	0.27	28	11	0.22
20	25	49	3.07	19	23	1.53	17	6	0.40	22	5	0.33
21	26	43	3.00	15	25	1.92	18	5	0.38	11	8	0.62
22	14	198	6.83	26	36	1.09	9	16	0.48	19	14	0.42
23	12	96	7.31	21	20	1.43	10	7	0.50	16	7	0.50
24	22	70	3.50	25	27	1.23	22	6	0.27	29	5	0.23
25	16	236	6.21	22	52	1.29	27	6	0.15	25	12	0.29
26	20	71	4.44	27	12	0.71	6	11	0.65	21	7	0.41
27	24	69	3.40	28	14	0.64	26	4	0.18	5	16	0.73
28	13	130	7.22	23	25	1.32	7	12	0.63	3	15	0.79
29	19	243	4.56	30	26	0.46	25	12	0.21	24	17	0.30
30	30	40	1.21	29	21	0.57	29	2	0.05	14	21	0.57
計		3942			1224			319				353

うな用字意識を以て書かれたと思われる例がある。

(甲)では、副詞に添えられた場合の例について述べた。これは万葉集などにも例をみ、又古事記などにも多く見られる。これは「也」字に限らず「者」「焉」なども用いられている。これに関連して鶴先生の「万葉集における『者』字の用法」(万葉才二一号)という論文が出ているのでごらんいただきたい。

(丙)に於いては助詞に接続した「也」字の用例と、どうしてもどの分類にいれるべきか解し得なかつたもの、最後に特殊な用法と思われるものゝ例を示し気づいた点を述べてみた。

特殊なものとしてあげたものゝ才一は卷一、二に見える「不須也凶目汚穢之処(国)」「頗傾也凶目杵之国」の例である。これらの訓みは書紀中に「不須也凶目汚穢。此云伊儺之居梅枳多儺枳。」「頗傾也。此云歌矛(布)志。」とあるところから、二例とも「也」字は不読の文字であることは明らかである。

才二には卷十四に見える例で、「奉獻庸調」御調也」絹練。』である。この場合「御調也」が文中にあるのはおかしい。「庸調」の傍註として「御調也」としたのを間違つて入れたとする国史大系の説が正しいと思う。

三番目に卷二四に見える例であるが歌の最後に「也」字が記されている例である。これは一見いかにも不必要な文

字であるように見える。国史大系本でも「也、恐衍」と頭註にある。書紀に詠まれている他の歌の例をみても「也」字が表記されているのはない。しかし書紀以外の文献にはかゝる用法はかなり見えるところである。(古事記、常陸風土記、肥前風土記などの歌の表記の例)これらのことから書紀の編者の誰かゝこのような用字意識を有していたとしても不思議はなく、一方的に「也」字を衍としてとり扱うことには賛成出来ない。

(乙)に於いて各卷に用いられた用法の種類、その用例数、及び各卷に於ける全例数、その全例数と各卷との比率を一目瞭然たらしめる為に、表を作り大まかではあるが全体的な考察を試みた。

才一表で全巻を通じて見られるのは、名詞と動詞に接続して断定を表わした用法だけである。これは「也」字の一、二、四例中八九六例に及び約四分の三を占めている。又この種の用法は他の奈良朝時代の文献にも見え、当時一般的な用法であつたと思われる。

各巻の用字の比率をみると卷六には一頁に付四・一七で一番多く、卷二九では、〇・四六で最も少ない。これは福田先生が、之字の場合で述べられたように、書紀が幾人にもよつて編纂されたこと、編纂の態度に統一がなかつたことなどを更に裏付けるものと思う。因に同じような二、三の漢文的用字例について書紀に用いられた例の比率を表に

して比較してみる。

才二表をみると、卷四はあきらかに他の卷とは違つてゐる。「矣」は全然例がなく「焉」もたゞ一例のみである。しかし「也」字になると三八例も用いられ、全体からみた場合四番目に多く用いられている。卷六、十などは多少の差はあるが、他の卷に比べてそれらの文字を最もよく用いている卷である。又卷三十は「之」「也」「矣」は他の卷に比べて少く用いているが「焉」はかなり用いていることになる。このようなことから書紀の編纂者が、それらの能力に応じて個性を發揮しながら仕事を進めていつたであらうことがうかゞえる。

又各卷の用例を用法の種類の上からみても各卷の特徴が出てゐる。卷一、二などは複雑な用法がなされてゐること「是年也云々」の例が見えないなど共通点があり、卷九、一九なども、これらに次いで複雑である。逆にどの品詞に接続した場合でも国語の断定の用法と通じる用法だけしか用いていない卷がかなりあり、中でも卷四は才一才二の用例だけで著しく他の卷と異なつてゐる。

こうして各卷の特徴を把握し他の卷と比較し類似点や相違点を見出していけば、それによつて卷々の編纂者を推定することも不可能ではないと思われる。もつと詳細に考察を試み他の同じような漢文的用字例についても調べれば、もつとはつきりしたことがいえよう。

「夏目漱石のユーモアについて」

Ⅱ子規宛書簡集を通じてみたる

ユーモアと子規との交友Ⅱ

淵 上 陽 子

(一)

漱石は「文学評論」のなかで、笑いにおけるユーモア・ウイット・パンの区別を論じてゐる。「ヒューモアとは人格の根底から生ずる可笑味であるといふ事になりはせぬかと思ふ。外の言葉で云ふと、ヒューモアのある人の行為は他から見ると可笑しいが、本人自身では他から可笑しがられる訳はないと思つてゐる。彼は真面目である。無意識に可笑味を演じつゝある。もう一つ云ひ直すと、可笑味が当人の天性、持つて生れた生地から出る。従つて取つて付けた様に見えない。行雲流水の如く自然である。之に反してもし人を笑はせると云ふ結果を豫期して可笑味を演ずるならば、其人は如何に巧妙に道化しても、道化を自覚しつゝ遣つてゐる。意識して、尋常にはずれた行為言語を弄するならば、其行為言動は故意である。即ち不自然である。仮り物である。内から湧いたのではない。外から引つ付けたのである。私の解釈によると是がウイット(ウイットのことか)である。」として、ユーモアはウイットよりも本来の人間性、自然の人間味を